

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

子どもたちの参加した「大モンゴル展」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002188

第2章

子どもたちの参加した「大モンゴル展」

小長谷 有紀

1. はじめに

国立民族学博物館において1998年に実施された「大モンゴル展－草原の遊牧文明－」のさまざまな展示の試みのなかで、コストパフォーマンスが最も悪かったのは「照明の演出」であろう。照明デザイナーによるプログラムを運用し、単調な展示場に変化をあたえ、空間に時間の次元をあたえた。モノの少ない広々とした空間の余白部分が意味を持つことになったのは、照明の変化のおかげである。しかし、多くの入館者は照明変化そのものに気がつかないか、もしくは解説は一時的に読めなくなることに對してたいそう不満を抱くという反応を示した[小長谷 1998]。現在、存在する光の効果を頭の中で除去するシュミレーションをして、その意義を測れる入館者などいない。悪評のなかで、それでも照明の演出は続行した。

しかし、会場をぼんやりとながめてサーチしていると、驚いたことに子どもたちの多くは光の変化に気づいていた。空に模された天井を見上げていた。子どもは明らかに大人とは異なる情報策出能力を備えていると確信した。

残念ながら、子ども向けのアンケートでは、この照明について質問を用意していなかったため、数値でこの論点を示すことはできない。限られたデータ量ではあるが、子どもという一種の異文化を理解する一助になることを期して、子ども向けアンケートの結果を以下に報告しておきたい。

2. 子ども向けアンケートの実施

子ども向けアンケートは、字体が工夫されており、紙面全体に親しみがあり、以下のような質問から構成されていた。

- 1.モンゴル展でおもしろかったのは何かな？
- 2.マルチメディア・ゲルでコンピュータにさわってみた？
- 3.モンゴルの服を着てみた？
- 4.さわってOKマークのものでいろいろやってみた？

5. スタッフの人にいろいろおそわってよかった？

6. モンゴル展にきてよかった？

7. 今日は誰と来たの？

8. あなたは・・・（学校名と学年をたずねる）

アンケートの実施日は、大人のそれに等しい。有効回答数は、1回目で72、2回目で52、3回目で80で、総計204であった。

3. 子ども向けのアンケートの結果分析

子ども向けのアンケートにある質問項目はすべて大人のアンケートにもある項目である。そこで、大人に対するアンケート結果との差異がどのような展で顕著になるかを析出することによって、子どもたちのみた「大モンゴル展」の像を浮かび上がらせることができるだろう。ひいては、子どものための展示をする際の課題を明らかにすることにもなるだろう。

・展示で印象に残ったコーナーについて

「その他」を含む15の項目に分けて選択肢を用意している点は、大人のアンケートと等しい。しかし、回答の状況はまったく異なっている。

まず、大人の場合は複数回答の総数が少ない。平均して一人あたり2.65個に印を付けているのに対して、子どもの場合は、複数回答率が高く、平均すると4.97個すなわち一人およそ5個程度を選択していることになる。

順位の記入を特に要求していない場合でも、大人はたいてい3位くらいまでを念頭に選択している、とみることができよう。1位から3位まではそれぞれ53.2パーセント、39.0パーセント、38.0パーセントと続き、以下は30パーセントに達しない。上位3位に評価が集まっていた。それらは、「伝統的ゲル」、「よそおい（試着コーナー）」、「ミニコンサート」であった。

いっぽう、子どもは好きだけ選択するので評価が分散する。これは子どもの評価方法ないしアンケート記入方法の特徴とみるべきではある。ただし、子どもの場合、展示に対する見方そのものがもともと分散的であると理解してもよいのではないだろうか。

そうした分散状況のなかで上位をしめるのは以下の6点である。

- 「ひびき（試奏コーナー）」（14.0パーセント）
- 「よそおい（試着コーナー）」（12.3パーセント）
- 「からくり壁面」（12.1パーセント）
- 「伝統的ゲル」（11.1パーセント）
- 「未来のゲル」（9.1パーセント）
- 「コンサート」（8.1パーセント）

大人の場合の上位5位と比較すると、注目されるのは、まず「からくり壁面」の評価が高いこと、つぎに「未来のゲル」が選択されていることである（写真1）。

少なくとも「からくり壁面」のようなローテクは物理的しかけによって、情報を策出させようとするタイプの展示技法が、大人よりも子ども向けであることが理解されよう。



写真1 太陽光発電器と風力発電機を備えた未来のゲル

「未来のゲル」は、モンゴル遊牧民が過去の存在ではなく、同時代を生きており、遅れた生活様式を送っているのではなく、技術を享受して未来を築くことができる、ということを示しているものであった。ところが、子どもたちは、こうした理屈をいとも簡単に越えて新奇なものには目をみはるのだろう。子どもの関心のありかたが如実にあらわれているとみてよいだろう。

マルチメディアへのアクセスについて

大人の場合、約50パーセントが「さわった」と回答しているのに対して、子どもは約80パーセントまでが「さわった」と回答している。コンピュータに対する障壁がかなり低いことを示している。さわった人のなかでの満足度は、85パーセント程度で、大人との差があまりない。

試着コーナーについて

大人の場合、約30パーセントが「試着した」と回答しているのに対して、子どもは約70パーセントまでが「着た」と回答している。マルチメディアと同様に、参加率がきわめて高い。着た人のなかでの満足度は、82パーセント程度で、大人との差



写真2 プレイロット

はあまりない。

OKマークの付いたコーナーについて

大人の場合、約90パーセントが「体験した」と回答しているのに対して、子どもは約93パーセントまでが「さわってみた」と回答している。上記2つの質問ほどではない

が、やはり子どものアクセス度が下がることはない。満足度は、子どもの場合96パーセントに達し、大人の77パーセントをはるかに凌ぐ。子どもにとっては、たださわってみる機会が設けられているだけでも楽しいことがあらわれている。

二階展示場にプレイロットと称して、将棋や骨の玩具で遊ぶ場所を設けておいた(写真2)。決して大人を拒否して子どもだけを囲い込む万尾ではなかった。けれども、結果的に子ども用の遊び場として機能したことがアンケート結果からもうかがわれよう。

スタッフについて

興味深いことに、子どもは「よかった」「まあまあ」を合わせても68.6パーセントにしか達しない。大人の場合は90パーセントが肯定的に評価しているのに比べるとかなり低いといわざるをえない。子どもにとって、能動をいざなう引率者や、蘊蓄をかたむける解説者は、さほど重要な存在として認識されていないことがわかる。

「子どもを対象とする展示ならばインストラクターが欠かせない」という発想は、きわめて勝手な大人の思いこみであることがわかるだろう。

もちろん、インストラクターによる「正しい導き」や「より楽しい導き」はありうるので、子どもにとってのインストラクターのあり方を十分に模索する必要があるろう。

モンゴル展の全体について

「とてもよかった」が54.1パーセント、「よかった」が34.5パーセント、「まあまあ」が11.3パーセントで総計100パーセントに達し、「よくなかった」という回答は無い。能動型の展示をめぐる試みを十分に楽しんだとみてよいだろう。

4. さいごに

「大モンゴル展」は、必ずしも子ども向けの展示であったわけではないが、子どもへの配慮を心がけたことは確かである。あえて言うならば、「大人を子どもに変換する実験場」であった。その結果、子どもたちは無理なく、さまざまなことに対して興味を分散させながら、何事にも積極的に参加して、おおむね楽しんでいたことがアンケート結果からうかがわれる。自ら参加しえたものはすべてよく評価する、という傾向があるといっても過言ではない。しかし、このことは、参加型でさえあれば子供向きとして望ましいということの意味するわけではあるまい。

子ども向けの展示は、今日もはや参加型であることは当然の前提条件である[染川 1994]。参加型展示を実施する場合の課題として、本アンケートの結果から明らかになったのは以下のような点である。

- 1.インストラクターの必要を強制しないこと
- 2.情報策出型を活用すること
- 3.パーソナルな参加型がもつ限界に対して補完すること

特別展の期間を終了したのち、「大モンゴル展」は韓国京畿道博物館に移され、1999年6月21日から8月21日まで開催された。そこでは、展示空間が狭少なために全体の展示品は少なくなっており、以下の二点について展示方針の変更が認められた。

まず第一に、内容面について、韓国とモンゴルとの関係を示すために、年表や絵画などに韓国的変容がほどこされたことである。韓国は、高麗時代にモンゴル帝国に侵略されており、元朝より王妃を娶っていた歴史的関係上、韓国にとってモンゴル文化は自文化の一部である。モンゴル展に認められる韓国的変容は、異文化理解から自文化理解への変容でもあった。

第二に、展示技法について、たとえば絵画の展示台を低くして子どもに見やすくするなど、あらかじめ展示全体が子ども向けにアレンジされた(写真3)。教育委員会に対する公報活動が公を奏しているらしく、幼い子どもたちの小集団による見学が相次いで見られた(写真4)。広報活動も含めて一貫して、子ども向けの展示という方向へのシフトが認められた

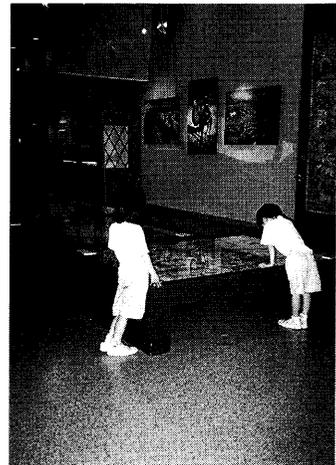


写真3 子ども視線に合わせた低い展示台



写真4 幼稚園からの団体入館

のである。韓国への移設を決断し実行した京畿道博物館の学芸スタッフは、「大モンゴル展」の能動型という特質を子ども向けであると判断したに違いない。

国立民族学博物館はこれまでに子ども向けの展示についても、参加型の展示についても概して積極的に取り組んできたわけではない。しかしながら、実際の入

館者の大半をしめるのは中学生および高校生である。小さな子どもではないし、かといって一般の大人でもないという中学生および高校生こそを念頭において、参加型のあり方をこれから模索する必要があるだろう。

追記：特別展「大モンゴル展－草原の遊牧文明－」は、日本ディスプレイデザイン協会が主催する1999年ディスプレイデザイン賞において、1998年度産業奨励賞を受賞しました。あらためて、展示に協力して下さったさまざまな関係者各位に対し、心から御礼申し上げます。

参考文献

小長谷有紀

1998 「問わず語り「モンゴル展」のその後」『季刊民族学』86、
pp.111－116頁

染川真澄

1994 「こどものための博物館」(岩波ブックレット362号) 岩波書店